紹　介

スミス生誕250年

見　野　貞　夫

ことし1973年はスミス生誕250年めにあたる。リカード生誕200年だった昨年と同様，スミスにも二，三の論文がソ連で発表されている。これをいま二つばかり紹介しようと思う。その一つは，スミスの科学的座標を，限界の指摘をともなわせつつ，古典的な手法で確定する概説論文である。もう一つは，現代ブルジョア経済学がスミスを自己の理論源泉としながらも，本質的にかれの科学的真随をいかほど否定し歪曲するかを，現代の関係論文や作品を通じて示した論文である。この二つの方向づけは，現代経済学としくに経済学史の課題であり，理論構成と，そのための諸理論の批判，あるいは理論展開と学史批判の二側面を，学史研究の内部に再生したものとして，スミス理論の積極的評価と，いろいろな解釈や評価を批判するという消極的アプローチとの二つと位置づけられるかも知れない。

第2のアプローチに関していえば，非マルクス経済学でも，近代経済学でも，最近，スミス論はけっして少くない。経済学再検討を要求する現状がこの先人にまで，新しい秩序を求めてさかのぼらせるのだろう。均衡論や効用理論にひきつける考え方，雇用論や所得論をスミスのなかにみる見解。それはがいして，弁護論の系譜に方向づけた所産であるけれども，しかし最近では，こうしたアプローチをもってしてもスミスはどうもはみでるものと考えられこれをうけとめて，たとえば疎外論や分業論，そのほかの論説がスミス理論の考察として研究されている。

たとえば，その一角をあげると，

E. G. West: Adam Smith's Two Views on the Division of Labour, *Economica*, vol. XXXI, No. 121 (Feb. 1964).

——: The Political Economy of Alienation: Karl Marx and Adam Smith,

The Economic Journal, vol. 21, No. 1 (Mar. 1967).

Ronald Hamowy: Adam Smith, Adam Ferguson, and the Division of Labour, *Economica* vol. XXXV, No. 139 (Aug. 1968).

G. F. Stigler: Smith's Travels on the Ship of State, *History of Political Economy*, Fall 1971.

W. Nord: Adam Smith and Cotemporary Social Exchange Theory, *The American Journal of Economics and Sociology*, vol. 32, No. X (Oct. 1973).

Robert Lamb: Adam Smith's Conception of Alienation, *Oxford Economic Papers*, vol. 25, No. 2 (July 1973).

W.J.Samuels: Adam Smith and the Economy of a System of Power, *Review of Social Economy*, vol. XXXI, No. 2 (Oct 1973).

R. L. Meek; A. S. Skinner: The Development of Adam Smith's Idea on the Division of Labour, *The Economic Journal*, vol. XXX, No. 332 (Dec. 1973).

である。最後から2番めの論文を例にとると，この論者によれば，資源の配分に関する市場選択論のほかに，いっそう広く複雑な権力システム論がスミスのなかにある。後者をさきのにくらべて第2の伝統と名づける。こうした制度論的アプローチをみとめると，スミスをはるかにゆたかに解明できるという立場からの試論がこの論文にほかならぬ。

ところで，ここに紹介するスミスに関する論文は，

Ф. Я. Полянский: Адам Смит-основоположник классической Буржуазной политической экономии, Вестник Московского Университета, No. 5 1973.

Вл. Афанасьев: Адам Смит и современная Буржуазная экономическая мысль, Вопросы Экономики, No.9 1973.

である。わが国の学会水準にてらして，こうした論策もけして高い水準とはいえない。日本における高度のスミス研究はさすが逸しえないものとみられて，この論文中にも，そのすばらしい成果を賞賛している。このことは，将来に展望をつけていうならば，わが国のスミス研究の高い状態ではなく，ソ

連のおくれを物語るように思われる。将来の地点で考えなくても，同じ古典経済学にありながら，スミスとリカードでは研究にひらきがある以上，わが国の高いとみられるスミス研究も，リカードへの格差をもっているかぎりで，つまり両人がひとしい水準で研究されていないかぎりで，けして絶対的なものではないであろう。

*　　*　　*

ブルジョア経済学の創始者スミスが生まれてから250年。この記念すべき日を多くの国の経済学者は注視して，経済思想史において重要な役割をはたしたこの思想家に，当然値するに足るものを与えようとしている。若干の国では，かれの見解に特別の関心が集まり，たとえば日本の論者は，スミスの作品やかれに関する10ヵ国の文献を出刊するなど壮大な目録を編集した。

ブルジョア経済学の俗流化はずっと昔からあることなので，スミス学派の考え方ですら，かれらにはあまりにも急進的にすぎ危険であった。スミスは労働を富と価値の源泉として，利潤・利子・地代を不払労働の諸形態と考えた。おのずから，そこに資本制所得が搾取から生れるという結論が生ずる。この結論は現代の弁護論にはとうていうけいれられぬ。かれらを支えるのは資本に生産性があるという暗黙の伝説である。スミスはともかく客観性のある経済法則を探究したのに，現代の経済学者はこれからのがれようとしたり，資本主義発展の法則を主観的なものとしその矛盾をかくそうとするのである。現代ブルジョア経済学史で賛同を思いだすのは経済成長に関するスミスの見解要素である。〝諸国民の富〟の著者に内在する唯物論的方法論は決定的に，古い用語をもって銘記されたし説明されもした。けだし，それは現代資本主義の理想化を妨げるから。それゆえに，ブルジョア論者の記念すべき雄弁には大きなふくみがある。けだし，それはスミス最良の理論やその科学的要素を拒否してしまうからだ。マルクス・エンゲルスによる総研究の結果，ブルジョア経済学の科学的研究段階になり，最良の理念を考察することが可能となり，客観的経済法則があるとか，労働を価値源泉とするこの古典学説がマルクス経済学の生成を歴史的に準備することで重重な役割を果したので，ソビエトの学者や外国のマルクス主義者はまったく真実に，この偉大なスコットランド人に祝賀の意を表すのである。

1723年関税吏の息子として，スコットランドのカーコーディで生まれたスミス。かれの経歴は，エディンバラ大学およびグラスゴー大学の講師，貴族子弟の教育者，最後に，老年の関税吏とたどっていく。かれは当時の大きな実業に関係せず，倫理的原則にたいして，

賞讃をおしまぬ偏愛を体験した。が，もうける企業精神にたいしてではなかった。これを明白に示すものが，多くの倫理的文節を含む，59年発刊の〝道徳情感論〟という講議である。異常に仕事熱心で科学的良心をもすぐれてもち合わせていたスミスは主著〝諸国民の富〟を準備するために，何と12年間働いた。その作品は1776年に発刊，かれを世紀永劫にわたり有名にした。この研究は経済学の試金石として，独立の特殊科学であり，研究対象，明確な限界，独自な方法論，一連の経済学説，経済政策綱領などをもっているのであるが，こうした科学を考えださねばならなかったのは，教授ばかりではなく，企業者たちでもあった。否，国家の活動家も。大きく厚い本においてそれが仮惜なき経済法則の秘密を保有し，多くの経営上の処方をも保持するかぎりにおいてはそうである。スミスは経済理論をもって新時代を開き，ブルジョア経済学の父となったけれども，他面，小ブルジョア出身のつつましやかな学者・教育者として，18世紀のイギリスブルジョアジーのイデオログであった。当時，ブルジョアは折からの高揚を享有しますます経済活動を拡張し新年代の到来を体現しながら，大陸ヨーロッパの封建制度に対決した。この時代では，進歩的なものはすべてブルジョア的なものと同一視されたが，それだけにスミスは熱烈な進歩の闘士であった。かれの反封建的気風は論理的に，イギリスブルジョアジーと連帯するものであった。封建的恣意や政治的専制に対抗しておだやかな性格だとはいえ，民主主義的見解を支持するのがスミスの特徴であった。が，それはまた，封建制度や重商主義，フィジオクラート，分業，商品交換，価値法則，資本の性質，蓄積方法，富の本源的源泉，所得形態，再生産などに関するかれの議論のなかにすべて，明白にあらわれる。

マニュファクチャー時代のスミスが資本主義の一般理論をつくり，経済法則を論ずるのに，かなり成熟した理論をもってした点は一見，パラドックスのように思われる。が，これを説明するのは18世紀60年代にイギリスで産業革命がはじまり70年代にかなりの規模に達していたという事情である。かれはまさに，この一大事件とは同時代の人であったのであり，最初の工場出現とか，資本生産のマニュファクチャー形態から工場制への移行を身近に観察したのである。17世紀のトーマス・マン，ノース，ペティそのほかの人の作品におけるよりもいっそうふかく，交換法則，資本，その機能，賃金，資本制所得源泉，その分配，生産の動向などを論じこうした問題の解決を，新しいより高い段階にひき上げ資本主義経済学をつくるべく，それに広い展望をひらいたのである。

書斎学者だったとはいえ，スミスは資本の諸範疇を論ずるにあたり，純理論問題の片隅に埋没してしまうことなく，経済政策の要綱を作成した。この要綱は反封建的なブルジョア性格をおび，18世紀ではたしかに進歩的だった。浪費的貴族にきわめて倹約なブルジョア

ジーを，封建的富の非生産的使途に，もうかる資本投資を，貴族の無為に，商工業者の模範的な労働愛を対置しつつ，スミスは資本主義の優超を明らかうにし，その発展をば力強く方向づけたのである。かれは農奴制を大陸の農業進歩を阻止ずる基本的要因を考え，また封建的な生産規範を“野蛮な制度“として位置づけた。土地の苛税（フランスのタルイと同類の）が農民所有の購買や農業投資を妨げるものとして論じられて，都市においてのみ，仕事熱心な農民の蓄積が期待できる生産的適用をみいだしたのだと考える。穀物貿易の規制や，17～18世紀の穀物輸入禁止に反対するかたわら，かれは，中世に特有な人頭税システムを批判しブルジョア性格の間接税を導入すべしとしシャシ品への課税を求めた。

下僕の維持を浪費と断定し，社会におけるもっとも尊敬すべう階層（聖職者・貴族・官吏・将校・君主）の労働はふつうの下僕労働と同列の不生産的なものと説明した。貴族の寄生性にたいするこの批判はブルジョアジーの支配したイギリスにおいてすらもアクチュアルであった。敬意を表してよいロードが大量の剰余価値を取得し資本蓄積と農耕を妨害しているかぎりでは，それを批判してゆくことは，反封建的革命が成熟しつつあったフランスにとって大きな意義を有していたのであり，後に、スミス学派のこの考え方はほかの諸国，たとえばロシアにも到着して反封建的気分をひきおこした。その影響はデェカブリストのイデオロギーにいちぢるしい，なるほどスミスその人は革命めいた結論を与えなかったし，地主を払拭することも要求せず，封建制度を，純粋に商業視点から判断してその消長についての合則性をみとめなかったのであって，むしろそれを反奴隷制の一変種あるいは偶然の所産であるとすら断じた。かれの作品では封建制度は重商主義批判と重なり合い移行して合うが，その重商主義はカトリシズムとならんで，中世の迷信の子として冷遇された。

この重商主義批判はスミス世界観のブルジョア性格をも，イギリス資本主義発展の新段階をきわめて明白にうつしだしたものであり，その新段階では，原始蓄積の段階をすでに通過して，大企業がつくられ，もはや絶対主義独占会社の後見を必要としなかったし，商工業の国家的規制を求めもしなかった。産業ブルジョアジーの思想的役割をはたすスミスは重商主義の批判を通して，生産力の自由な発展を闘い求め，このかぎりで進歩的意義を有していた。たしかにスミスは，ノース，ボアギュイベール，ケネーなど多くの先人をもっていたけれども，その立論にはオリジナリティがある。工業の根本的利益，分業のメリット。貨幣機能の矛盾と重商主義的イルージョンを一かつし，封建制度の批判に重商主義的規則の暴露を結びつけた。だがしかし，スミスは重商主義の史的役割とか原蓄期の諸問題をまったく理解せず，植民地主義の驚くべき空論を明示して人間感情のために諸要因を分析することをまじめに教えた。

かれは自由貿易論の宣布者として登場，重商主義政策を反論して，投資部面をうまく選

択するのは立法者ならず各個人であるとし，次のようにいうのである。すなわち，法律の干渉が一切ないならば，人びとの私的利益と傾向はおのずと，かれをして社会の一定資本をあたうるかぎり正確に社会全体の利益に最大限に合致するように，存在するさまざまな産業部門に分配せしめるのだが，いろいろな制限は自然にして最大の利益のある資本分配をば破壊してしまうのであると。後に工場主となるイギリスマニュファクチャーラーズの宿望を表現したスミスの自由貿易論は，工業国としてイギリスが経済的に拡大してゆくための戦闘的武器になった。それは農業国の関税障壁をうちやぶりそれを商業的にしぼりとるのを助けたことが後になって判明した。フリートレードの政策をすべての時代を通じて，唯一の，合理的にして有利なものと考え，商業・投資の自由を社会的調和の勝利ととりちがえしてしまう場合，そこにはスミスのブルジョア性格の限界と政治的なナイブさが明白になるわけである。が，産業革命のはじまった頃としては，このスミス的プロジェクトは，疑いもなく，進歩的であった。当時，イギリスにはすでにクロンエルの般海条例があり，東印度会社は国家中の国家，真の植民主義的怪物であった。後，対仏戦争のなかで穀物条例があらわれ，イギリスはフリートレードまでに長い期間があったが，それを暴露するわけにもいかず，スミスもその善行を確信していた。

重農主義を特徴づけて，スミスは〝政治経済学の農業システム〟とか，〝自由主義の壮大な理論〟として命名したが，商工業労働を不妊とみとめる見解には反論して，農業労働の生産性が高いからといって，それは都市住民の労働が不妊であることにはならないといい，後者については，毎年消費価値を再生産するし，分業を梃子に生産性を高め，節約や蓄積の傾向は農業よりもむしろ大きいと指摘するのを忘れなかった。しかし，農業労働がいっそう高い生産性を保有するといった重農主義的見解を採用する点はかわらず，富を，貨幣とではないが，消費対象と同一視する経済的自由主義の教説を賞讃する。地代を論ずるさいには，重農主義の言説も再生し生産的労働についての固有な考え方すら無視するのである。手工業者・製造業者と商人をかれは一かつしてとらえたものの，その労働生産性はけっして一律ではない。都市ブルジョアジーの節約についての俗人的蔵言はかなり弱い。

スミスは財政問題にも関心を向けて，それを純ブルジョア的に展開した。人頭税や教会領地を封建期の遺物と考えたスミスにあっては，それが国家に収入をもたらす特殊基金とみとめるものの，商業の仕事と支配者の状態ほど矛盾するものはない点が強調され，地代・利子，シャシ品などに主としておちるような税システムがのぞましく，利潤課税を承認するにせよ，商人製造業者は価格をつり上げ，損失をカバーし消費者に転嫁するのであるから，それは実際上，無意味になることが力説された。この租税論は賃金にもあてはまり，

それに課税すると，労働需要と食料価格が不変ならば，賃金騰貴の生じることを証明した。

このようにして，貴族と僧侶の租税免除にとどめをさす，地主や快楽主義者の財布中の所得に容赦しないところの，18世紀ではきわめて先進的な財政領綱がスミスのもとで展開された。そのかわりに，同時に，成金，新時代の支配者として工場主や商人には，免税にたいして権利請求申告も交付されて，事実上，資本と利潤の財政的な不可傷性といったテーゼが表明されるにいたった。けして十分な根拠をもってではないけれども，かれは経済法則が無際限のそして恣意的な価格高騰を明らかに排除するという点を忘れていた。税を償うべく，資本家個人はこの方法を利用するだろうが，価格の全面的騰貴は財政的損失から製造業者を免がれさせるものではない。したがって，交換比率は従前の水準にもどり，支払わねばならぬ税はのこる。そこでスミスの租税転嫁論は，実際上，賃金や必需品への課税が労働者にとり危険ではないことを確認するのである。だがしかし，この規定の偽瞞ぶりは明らかである。そこにはほかに alternative なく，すべてひとしく，かれらは労働力を販売せざるをえないし，資本のために働き高税をば支払わざるをえない。現代資本主義のもと勤労者が財政的に掠奪される史実はこれを瞭然と示すのである。

スミスの最大の功績はといえば，商品生産理論の諸問題を開発したことである。経済学の自由貿易論綱領と租税転嫁論は理論的基礎を要求するから，かれは経済法則，何よりもまず商品交換・価格動向・貨幣機能領域における経済法則の探索にたち向かった。つまり価値問題の提起である。これを論ずるにあたり，スミスは，アリストテレス，トーマス・アクイナス，ペティ，ノース，ボアギュイベール，フランクリン，ケネーなどよりはるかに，すぐれていた。比較にならぬ高い水準をもって，この問題は，したがって系統的な解釈や部分的な解明が可能となった。その基礎的諸規定は正当であり，今日でもなお意義を失っていない。〝諸国民の富〟のうちに，読者は真実の価値論をみいだすのである。自然経済と商工経済の優劣に関する，18世紀イギリス資本主義の条件のもとで古い語法となった伝統的なこのalternativeを克服して，スミスは商品生産理論の問題に注意を集中した。分業を高く評価しそれをもって商品生産が発展する基礎の一つをかれは明らかにした。人びとの口に会膾されるかれのマニュファクチャー分業論の輝かしい叙述は周知のところである。なるほど分業を幼稚にも人びとの交換への神秘的な態度と結びつけているけれども，労働専門化の経済効率は独自の説得力をもって説明される。大きな成果は使用価値の区別なり対置である。このことはある程度，商品を特徴づける矛盾したモメントがスミスによってみとめられていたことを物語る。スミスにおいて大へんに重要で正しいのは価値と価格の対置と区別であろう。これをごっちゃにするのが現代俗流経済学の欠陥である。が，スミスは価格

現象学——当時ストルーヴェがそうあらわされた——に満足せず，その動向の叙述とか景気の変化・変動にかぎらなかった。真剣な一学徒としてスミスは価格形成の実現法則を発見し，価値問題を解決しようとしたが，このことはそれを逆に主観化しようとする最近の弁護論の誤論にひきくらべて，いまもって重大な優位を主張しうるのである。進歩的で正しかったのは自然価格と市場価格を区別した点である。これこそ問題の科学的解明を容易にした。けだし，市場価格は需要供給に依存するが，自然価格はその形成の恒常点と考えられるし，なお市場価格の日々の変動にもかかわらず，その合則性を明らかにすることができるのであり，その法則探究もたやすくなるからだ。価格から価値分析に移行するこの方向をたどり，スミスは労働を価値の決定因，そして真実の尺度と考え，この規定を後に系統的に展開するのである。スミスの中で経済思想の宝庫にはいる最大のものはリカードの作品に発展したものであり，とくにマルクスに結晶しているのもそれである。ペティは労働等価の推論だけを述べて，この規定を展開しなかったとするならば，スミスは前進を示し労働価値説を創造しこの理論にもとづいて科学としての経済学をつくることを可能にした。そして大量観察とか経済分析にすぐれた才能を発揮した。が，富はつまるところ一定量の労働にあり，その支出量に応じて交換されるという結論にスミスは到着した。貨幣も価値の外的尺度であり，商品流通の手段であるという命題も，その真実の尺度は商品生産者の労働である規定も争いえない。商品交換の等価法則を発見して，何世紀にもわたって賞讃されることになった。この法則は科学的経済学の試金石。これにもとづいて先人たちの作品をも通して，商品，その内的矛盾，生産者の労働価値実体，その形態の展開などの一般分析を，スミスはおこなったのである。

単純商品にとどまるかぎり，スミスは基本的に正しく価値と貨幣の問題を解決したが，この類型の経済と資本制経済の相異を理解しなかったので，後者に直面して，はじめの立場を失い，一つの誤った規定と，もう一つの誤った規定をごっちゃにしてしまった。同一でない生産形態に相異った価格形成をみとめたけれども，この相異を原則にまで高めはしなかった。かれにあっては，資本主義は文明の体現であり，単純商品生産はそのはじりであった。ところが，資本主義にいたると，価値実現が再分配をこうむり，価格形成も複雑になる。これを把握しないでかれは，賃金・地代・利潤などの諸要因をいれこんだ，いっそう複雑な生産価格といった範疇に直面して，当惑してしまい，価値法則はここで破綻するのであり，すくなくともこれにもとづいて，資本主義の価格を説明できないと考えた。価値法則の生産価格法則への転化というロジックはスミスにはとうてい考え及ばないところであった。かれは，資本制の価格形成過程を，平均利潤の法則にもとづいて考えず，無

思想にも，直接じかに労働等価の交換法則にもとづいて説明しようとした。そのために，当然のことながら，かれは自分の基本的な考え方を首尾一貫できず，自然価格が所得（賃金・利潤・地代）に分解してしまうというだけではなく，更にそれによって価格が構成されるかのような誤った結論をだすにいたった。生産価格の秘密，資本制価格形成の秘密をとき明かすことなく，これをそのままマルクスに残していった。

この問題についてスミスの失敗を方向づけたのは交換価値と，購買労働にたいする商品所有の支配とのまったく誤った混同である。それは投下労働と購買労働の同一視にみちびき，後に支配労働あるいは購買労働の尺度を与えるかぎり，賃金が自然価格の要因だという結論を準備するのである。一つの所得が重要な機能をはたすならば，利潤や地代も当然，同じような役割をはたすと判定するのは自然である。たとえば，スミスはさけがたく，一つの誤った結論から同じく誤った結論にたちいたる。自然価格にとってその所得が決定的な意味を有するというテーゼ。しかしこれは事実上，スミス価値論の起点となった基本規定を否定しさることを意味した。こうした価格は生産価格の法則に服して，乗余価値が分配される範囲内において平均利潤に依存する。再分配されるのは存在するものにかぎられるので，トータルとしては，資本主義のもとにあっても，価値は労働によってつくられることには少しのかわりもない。

スミスはともかく商品生産の経済法則を解明するものの，未熟な方法論を前提としている。その方法はといえば，非歴史主義，否，反自然主義ですらある。分業の発展が交換性向によって説明されたり，社会的分業がマニュファクチャー分業と同一視されたりして，商品生産の歴史的形成にとっての私有の意義が明らかにされないで，貨幣の発生と機能が乱暴に単純化されるなどして，商品の矛盾ははっきり分からない。そうであるかぎり，価値形態の展開も望めない。価値の量的ならびに社会性格的問題も解明できないまま残り，その量的分析も完全なものにならない。スミスには，具体的労働と抽象的労働，簡単労働と複雑労働，個人労働と社会的必要労働——こういう概念は無縁である。そのために，商品生産の歴史過渡的性格を理解しないで，商品を財の自然状態とみなしてしまうものだから，商品生産の法則としての価値法則の意義もうかび上ってこず，その生産形態の資本制生産への転化も鮮明にうつしとれない。むしろ価値法則を，かれは価格形成や労働・資本の部門間に再分配する要因として，一面的に論ずるにすぎない。この困難な問題を解決したのはやはりマルクス主義の創始者であった。

スミス作品の理論分野では資本の蓄積に多くの注意が集中されている。大切なことは，資本が理論問題として規定された点であり，固定資本と流動資本の区別，生産性の決定，

蓄積源を解明する課題も提起する。提起した問題を，積極的に解決する過程でかれは正しくも資本を資本主義経済の起動力とみなし，蓄積の本源因を生産部面に求めつつ，貸付資本には付随的役割を付して産業資本にプライオリティを与えた。かれは，生産的労働論を個別部門的アプローチから切りはなして，正当にもこの労働を，資本制生産の視点から，資本と交換される労働としてつかまえた。こうもアクチュアルな問題がイギリス経済の新しい動向を配慮し，先進工業ブルジョアジーの視点から大胆に解釈される。しかしながら，スミス学説のブルジョア的限界，多くの平凡な判断も見えるし，俗流的要素も決して少なくはない。とりわけ，資本の本性を理解する際には。たとえば，かれの非歴史的方法論をもってすれば，資本をば，単に生産的ストック，物的富の堆積としつ，自然主義的に裁断し，資本の社会的機能やその階級的搾取の本質を無視することになる。それは資本の分類にさいしてまずいことに，固定資本と流動資本の特質を流通一般に関与するか否かのメルクマルで処理してしまう。固定資本は流通にかかわらず，たとえば能力もこれに含まれるのであり，また貨幣は流動資本に属するのだと。資本回転の局面も無理解。これに関連して，固形的対象の製造を生産的労働の特質の一つと考えて，かれは自然主義傾向を示しフィジオクラットの見解に逆戻りする。たしかに資本蓄積論を多く論じたが，原始的蓄積と資本制蓄積を混同し，倹約なブルジョアジーの善行が蓄積について大切だという，幼稚きわまる見解をうんぬんして，真の蓄積源をあいまいにした。農業はもともともうかる部門だといったが，これはかれが代弁する工業ブルジョアジーの経済綱領に撞着する。ここにもフィジオクラシーの要素が顔をだす。賃金論にも法則確定をめざすスミスはアップ・トゥ・デートなブルジョア弁護論よりもはるかにすぐれている。その弁護論はこの法則を否定するのだ。賃金を労働需要にも，消費財の平均価格にも依存させるかれは，生産手段論の外にでて労働者は当初，全生産物を賃金として取得していたのだけれども，後にいたり地主や資本家によりさしひかれることになったのだと指摘して，資本主義の社会的条件や生産手段独占の効果をとらえ賃労働搾取をひきだす。たとえば，賃金率の決定に際して労資利害の対立，賃率増加には労働者の闘争が必要であること、植民地の創設がそれである。名目賃金と実質賃金の対立，その職業的民族的差異などの要因を明らかにするのも大切であり，経済法則の作用するところ労働移民の自由もあるというわけである。資本主義のメリットについて不動の確信もその矛盾を検証することをば可能にする。しかしながら，他面、非歴史主義の立場から賃金をすべての生産形態にまつわる現象とみなし，資本の発展とその大いさだけに影響を与えるにすぎぬと考えるので，また労働と商品としての労働力を区別しないで日常用語を議論のためにとりあげ，賃金を労働の真実の支払いとみなしているものだから，さき

の全生産物からの部分報酬なり控除という考え方が失われてしまう。スミスの場合，賃金法則の確定にあたり，その変動因もとりいれるが，これは問題をきわめて混乱させてしまった。また，需要，賃金水準，出生率などの間に自動的な相互作用がありえない点が無視されたり，大量失業が軽視されたりして，経済発展の成果が労働者を含むすべての人に，約束されるというのである。

収入論についていえば，スミスはかなりととのったものを開発している。利潤を独自の収入と把握する点で，それを地代の分岐形態としか考えない重農主義見解と袂別している。重商主義が利潤を競争に結びつけて，その源泉を流通過程に求めたのだとすると，スミスは生産領域にたち向った。重農主義は，地代ともども利潤を自然の賜とするのであるけれども，スミスは資本制収入のすべての形態を労働からの控除とし，事実上，不払労働なり剰余労働の帰結を方向づけた。これはブルジョア経済学最大の功績であろう。マルクスはスミス作品のなかに，地代，利潤・利子が不払労働を体化する剰余価値のさまざまな形態であるかぎりでは，剰余価値論の萌芽を認めた。利潤と賃金・利子の対置も大切。現代ブルジョア弁護論が利潤を通常の賃金のもとにかくそうとやっきになっている折柄，これはきわめてアクチュアリティをもつ。利潤・賃金の比例しない動向に法則を認め，両者が同時に高いことは決してありえないとかれは正しくも宣言するのである。

利潤を労働支出からの控除とする見方もなおブルジョア視界から脱却していない。そのために徹底した結論をだせないことになった。剰余価値と利潤を混同し，企業収入を工場主の賃金と論じたり賃金・利潤の動向因を近づけるなどした。スミスは資本主義の永遠性と利潤の自然性格を確信し，それを収入ばかりか価値の本源として，まったく不首尾におちいり，議論の矛盾を露呈してしまう。需要供給の法則の駄弁もこの価値理論から脱却させはしない。

スミスは地代論を多く論じた。それによると，地代は，利潤と同様に，労働の控除である。これは地代をほかの資本制的収入形態と近づけることであった。労働価値説にもとづく問題の解決は前進した。土地改良のための資本投下の利子を，重農主義は地代の一種と考えたが，スミスはそうはみずに借地料としての地代から利子を区別した。地代を独占価格の結果と考えるスミスは土地所有の独占という役割を認めはしたが，絶対地代の解明にまでは至らなかった。そのかわりに，差額地代の二形態（肥沃度と位置）を明確に区別する。賃金と利潤の支払いが地代の出現する条件とみなされているかぎり，地代は，事実上，超過利潤といったものに接近する。リカード以前にすでに，地代が高価格の結果であってその原因ではないという見解が確定されていたのである。これに関して，価格は賃金・利潤・地

代に分かれるのであり，これからけっして構成されるのではないという規定は基本的に正しい。この場合でも，かれのブルジョア的限界は議論の明白な不徹底性ぶりや極端な反歴史主義を制約する。たとえば，地代は永劫の範疇であり地主の利益は社会の利益と一致するとか。これは自然価格にとりその構成分としての収入が決定的役割をするというもう一つの誤った思想に影響されているのであるが，マルクスはこのあたりのいきさつをとらえて，スミスでは地代を，あるいは自然価格を上まわる何らかの剰余，あるいは価格形成因とみるかと思うと，あるいはその結果であると同時に原因として規定しているとひねくった。差額地代もつまるところ，スミスの視界から脱落してしまうのである。

スミス学派の方法論が問題になるわけであるが，それは反（非）歴史主義にある。経済学の研究対象が何であるかを理解せず，スミスは重商主義の伝統を継承し，国家増長を主要な問題と考えた。また多くの現象（たとえば重商主義の創生記）が観念論的に説明されイギリス地主層に偉大な精神が付与されるなどする。そして経済分析ではしばしば分配論の観点が支配的にして，プライオリティが収入分配の項目に与えられた。これは，不変資本を無視して全価値を収入に解消するいわゆるスミスのドグマに連なる。後，マルクスそしてレーニンは容赦なくこのドグマに反論を加えた。経済現象の分析と叙述の結びつきをみいだせなかった点に注目して，マルクスの皮肉にもいうのには，スミスはいとも簡単に矛盾におちこみ，一面，経済範疇の内的関連，ブルジョア経済学のかくれた構造を追求しはするが，他面，これとならんでいかにして競争現象中にはっきりした仕方でそれが与えられるか，ブルジョア生産の実際にとらわれそれに実用的な関心をもつ人にとってと同じく，科学に無縁な論者にどのようにしてそう思われるかの説明に終始しつつ，両者の間を動揺するのである。だが，この二つには，相異なるものが仲よく同居しているのであり，そればかりか相互に移行し合い絶えず矛盾しているのだと。だがしかし，メリットとすべき方法的展開も大変著しい。基本的にいって唯物論の立場から——とはいえ機械論的だが——アプローチし，経済範疇の主観化とはさしあたり無縁である。資本主義のもついくつかの矛盾を解明しなかったものの，概して生産力的視点を一貫し，経済人モデルを資本の人格化モデルとして作りあげ，うむことなく経済法則を求め現象への価値アプローチを失わず，生産力発展をいろいろなところから解析して，その最大の条件を確定しようとした。それだから，スミスにには科学的要素が支配的であり，歴史学派や主観主義者，社会学派あるいは制度論者，ケインジァンそして現代ネオリベラリズム，さまざまな改良主義者などの方法とくらべて，文句のない優越性を保有していることを，これらのことははっきり示す。レーニンは，スミスをさして先進ブルジョアジーの偉大なイデオログと判じ，リカー

ド同様，スミスが経済法則を探究し階級利益の経済的基礎を判然とさせたのだと高く評価した。

次の論文にうつろう：

生誕から数えて250年という歳月は短い期間ではない。それなりに今日なお，彼が提起した問題は研究の争点や階級闘争の対象となっている。かれの見解は経済学史上もっとも複雑なものの一つと考えられるが，封建制度に対決するブルジョアジーの理論的武器になり，また資本制覇の武器とも化した。

ところで，現代ブルジョア経済学のこのスミスに対する態度はけっして一様ではない。スミスの意義をみとめるにかたくなな傾向，つまり科学的規定を否定する傾向が新古典派的綜合を呼びかける論者のところにある。その綜合はといえば，国民所得分析の現代的方法と，スミス・リカードその他，経済学の始祖たちの原理を結びつける点にその特質をもつ。スミス理論をはじめてスミス革命として，現代ブルジョア経済学が評価したからといって，このことはけっして経済学の領域において，科学的胎動を傷つけることを妨げはしないのである。

たとえば，H. G. Johnson: The Keynesian Revolution and the Monetarist Counter-Revolution, *The American Economic Review*, vol.LXI, No.2 (May 1971), E.G. West: Adam Smith, The Man and his Works, New York 1969 はスミス革命を問題にしている。スミスはイギリス経済学に寄与するところが大きかったし，マルクス主義の源泉になった。マルクス主義とは，資本主義ならびにブルジョア経済学に対決する革命的プロレタリアートの科学イデオロギーのことである。だがしかし，現代ブルジョア経済学はスミスの中に自分の諸規定についての理論ソースをみる。P. A. Samuelson: Economics とか，Pike E. Royston: Adam Smith, Founder of the Science of Economics, London 1965などこれである。経済的知識や資本制生産，矛盾にみちたブルジョア社会がいまだ未発展のために，ブルジョアの利益を代表したスミスの学説は大変撞着にみちたものだった。科学と非科学の二つの見解なり二つのアプローチの方法がかれのもとにあった。これが現代ブルジョア経済学がスミスをさまざまに評価する原因の一つをなしている。しかしこの評価はブルジョア思想そのものの中で生じる複雑な構造変化を体験しないわけにはゆかぬ。それをここにフォローしたいものである。

スミスの名は経済学成立過程の完了と直結しており，その18世紀後半はまさに資本主義の自由主義段階である。国家的干渉は，原始蓄積のための必要からいまや，桎梏に転化し新しい歴史的状態の生成とともに新しいアプローチも必要になってきた。個別部門の認識

ではなく全体としての盲目的メカニズムの研究が課題となった。干渉方策でなく法則の確定こそが問題。自由競争資本主義の経済的オルガニズムが発展する法則は全体としてとらえられないと理解できない。スミス以前では，商業（重商主義），財政（ペティ），農業（フィジオクラット）というふうに狭い部門形態で把握がおこなわれたために，新しい史的条件には答えないでいた。社会的生産全体を，彼の用語では〝諸国民の富の性質と原因〟を経済学の研究対象とし，本質的にも形態上も国民経済的性格をもつにいたり，マルクスが指摘するように，その全体をスミスは展開したのだから，スミス理論はある程度まで仕上げられた構想であった。それは，極端に矛盾し一元性に欠けているにせよ，科学的規定では単一全体の基礎に立却する。イギリス経済学者が当時，それを通して経済現象を研究したプリズム，マニュファクチャー分業はその礎石。この所説はその年代の諸関係を反映する。こうしたアプローチはさきの国民経済的性格の理解に衝突する。そこにマニュファクチャー期におけるスミスのきわだった役割を決めることになる。資本主義の生産関係がその生産力を育て決定するという一般的特質を立言し，部分的特性を特徴づけていないかぎりではそうである。スミスの功績は，18世紀には目新しかった自由競争の資本主義，経済機能のオリジナルな理論（多くは未完成にとどまったとはいえ）を開発したという点にある。彼は価値法則の作用するメカニズムの秘密を発見しており，労働価値説の資本制社会における方法的役割をつかむべくそれに近づいていた。資本主義社会を生産者たちの分業的連合と考えたスミスは，労働生産物交換の必要性を論じ，交換されるからにはそれを規制するのは労働支出だととらえた。またかれによると，労働が唯一の正しい価値尺度として，唯一の普遍的尺度なのである。このほか労働が分割されているかぎりで，それは交換の規制因であり，物的生産部門の価値源泉である。マルクスがいうには，スミスは価値をつくるものは，その使用価値が何であろうとも，一般的な社会的労働であるとみたのだと。具体的労働のさまざまな形態を価値源として，先人たちはいいあらわしてきた。たとえば，貴金属の採掘労働は重商主義により，農業労働は重農主義によりなど。スミスの労働は，部門特殊性に無関心な労働一般であり，商品価値の創出因として，質的に新しい発展段階の価値論展開に結晶する。分業論はスミス階級論の起点の一つであり，この点においてかれはブルジョア社会の階級構造をはじめて描きだす重農主義見解を，その部門制限性から解放してゆこうとする経済学者としてあらわれる。チュルゴーに反対して——というのはかれは工業資本家と農業資本家を二つの相異となる階級と考えるし，またこれら部門の労働者も同じように二分してとらえるからだ——スミスははじめて，三つの階級をブルジョア社会の中軸とみたし，しかもこれを永劫不易の自然秩序とした。かれの見解では，階級とは部門別

に形成されるのではなく，社会的に形成される。この理解は経済思想の上で前進する一大転換であったことはたしかである。

スミスの労働価値説と階級論は分配過程を研究する基礎となる。富創造者としての労働者が賃金として受けとるのはかれがつくった全生産物ではけっしてないとスミスは理解した。マルクスの整理によると，労働者が物に付加した価値は二つの部分すなわち賃金部分と企業者の利潤とに分かれるとスミスは把握する。したがって，地代や利潤は労働生産物から控除した一項目であり，賃労働の搾取部分である，とスミスは議論する。このかぎりで，またマルクスの解釈によると，スミスは剰余価値の真の発生をつかんだのである。そうすると，次のようにいえる。イギリス経済学者が研究する国富は資本制の富，資本以外の何ものでもなく，それを増加させる重要な手段はマニュファクチャー分業にもとづくのであり，相対的剰余価値を生む特殊な方法として生産性向上のほかの何ものでもない。スミスはかなりの程度に，マニュファクチャー段階における剰余価値法則の作用メカニズムを発見しかかっている。ブルジョア経済学者ウエストはスミスの国富概念をゆがめて，(資本の) ストックではなく (国民所得の) 運動としてつかみ，スミスの研究した富の資本制的本質をぬりつぶそうとしている。しかし富のもとにかれが実際，資本を研究していることをみとめざるをえない。ウエストのいうには，富の測度となるのは他の人なり他人の労働量をその助けをかりて購入することである。資本が搾取にくみこむ賃金労働者の数は事実上，その大いさを示す重要な指標となるわけであり，資本とは所詮，賃労働を搾取する関係以外の何ものでもない。

スミスの剰余価値論は多くの点で未開拓であり歴史的にその階級の限界は明白であり，あらゆる古典経済学と同様に，価値法則の視点から剰余価値の発生を確定できなかった点は銘記されねばならぬであろう。それなのに，ブルジョア経済学は剰余価値論に関して，スミスとマルクスとを同一視し，労働者革命論をよわめるべく，経済学においてマルクスが果たした画期的転換に疑問を表明しさえするのである。その一人がシュムペーター。彼によると(Cf.: Epochen.)，スミスの見解は，労働者が全生産物を生産し，貧乏人として企業家に剰余が残るように労働力を売るという考えから生じた結果である。

総合化の経済学者としてのスミスの面目は再生産論においてもみられる。農業資本を原投資と年投資に分け資本の相異った流通性格をうつしだしたのが重農主義だったとすればスミスはこれを固定資本と流動資本といった範疇で発展させ，農業にかぎらずそれを物的生産の全部門にひろげた。再生産過程の分析でなお逸しがたい意義を有する所見としてあげられるのは総生産物と国民所得の問題について，先人たちの諸見解をしめくくった点で

ある。重農主義が総生産物を工業生産物に及ぼさず，実際上，国民所得と地代（かれらの用語では純生産物）をごっちゃにし，そのために，この範疇の国民経済的性格を明らかにしえなかったのにたいして、スミスはこのとらわれた部門狭隘性の制約をうちはらい，“生産物”と“純生産物”を総生産物と純収入の範疇で発展させ，事実上，総生産物と国民所得をば区別した。物的部門の創出価値だけを国民所得にいれて，それより発生するサービスは考えない統計上の実際は若干の諸国にみられるけれども，これこそまさにスミスの見解であった。

18世紀の資本主義を研究するのに，分業の視点からこのようなアプローチをくわだてることは，全体的プランで資本制経済の重要な現象と合則性を鮮明にし叙述そして研究せしめるかぎりでは，スミスにとってきわめてみのり多いものがあった。かれ個人はイギリス経済学の進展に大きな貢献をしたが，これこそマルクス主義の源泉なのであるが，同時にその一般化のスミスらしい役割が所説の矛盾を制約して，俗流論に転落する一つの原因にもなった。

資本主義弁護をはかる特殊な傾向としてのブルジョア経済学の形成は，18世紀フランス革命の結果として生ずるブルジョア社会の段階分化を，イデオロギー的にうつしだすものであった。この方向は，古典経済学とりわけスミスの非科学的な諸規定を分離抽出して，系統化することに関連している。この過程に着眼して，マルクスのいうには，経済学が一定の段階に達して，確固とした形態に鋳型化した後，つまりはスミスの後に，それから区別できる経済学の別の変種として，外的現象を表示しその再生にすぎない経済学中の要素が生じて，俗流要素となったのだと。現代ブルジョア経済学が自己の理論源をスミスのうちにみるかと思うと，その科学的なものの採択においてかれを否定するのは，やはりスミスにこうした二重性があるためである。

ブルジョア経済学は，商品生産者の労働における二重性と，そこから生じる資本制経済の全過程にまつわる二重性との間の媒介環をなすかぎりで文法上大切な意味合いを有すると思われる交換価値と使用価値の区別を含めて，スミス理論の科学的な規定にことごとく反対する。この結合をはっきりさせておくことは，マルクスがこれをやってのけたのであるが，俗流弁護論の構成に鮮烈な一撃をうちすえることになった。その構成の重要な基礎をなすのは，資本主義の経済＝社会的本質を外的な現象形態の叙述をもってとりかえることである。使用価値と交換価値をスミスが区別したことはみとめるものの，やたらにかれの立場や発見内容をゆがめる。たとえばサミュエルソン。かれによると，大変大きな使用価値をもっが大変すくない交換価値しか支配しない商品（水），逆に最大限にすくない使

用価値を保有するが最大限に大きな交換価値を支配する財（アルマズ）があるといった—価値のパラドックスをスミスがすでに定式化しているが，このパラドックスを，スミスはとき明かすことができなかったのだと。

しかしこうした評価は何といっても，スミスの真実からはほど遠いものである。スミスは交換価値に注意をよせて，労働の特殊性と無関係に，商品の生産に支出された労働量中に真実の価値尺度を求めているのであって，パラドックスの解決に近づいているし，使用価値と交換価値の相互関係の近傍にたっている。しかし内的な原因つまり労働の二重性を確定できずじまいだったのはほんとうであるが。アメリカの一論者も，スミスのこの区分を，主観的なもの（使用価値）と客観的なもの（交換価値）の対立のうちにみる。たとえば,J. B. Bell. A History of Economic Thought, New York 1953。商品の二重性が労働の二重性にうらうちされているかぎり，この評定はもとより正しくない。この問題についてのスミスの議論を，使用価値と交換価値を比較する問題を提起しているのだというふうに解釈する人もある。たとえば，交換価値が使用価値を超過するとか，あるいはその大いさに到達しないといったパラドックスはきびしくいうならば，無意味である。けだし，異種のこの数値が比較できる基礎をスミスはもたないからだと(J. Stigler: Essay in the History of Economics, Chicargo-London, 1955)。いや，スミスは二つをけっして比較などしなかった。そうしなかったのだ。ダイアと水を比べて，価値が使用価値によっては決定されぬことをスミスはいってのけただけのことである。いうところのスミスの価値パラドックスがブルジョア論者のもとでいらだちをひきおこしているのは不思議ではない。けだし，そこには価値を使用価値から説明しようとするブルジョア経済学に特有に支配的な弁護論に，打撃をすでに加えているからだ。

投下労働価値説に反してかれがしばしば発言した非科学的な価値論とは，価値を商品とひきかえに購買できる生きた労働によって決定できるのだとすることであり，価値と，他商品（労働力）の外的な発現をごっちゃにしてしまう点である。価値を交換価値や生産価格と同一視して，後者を説明できなかっただけではなくて，かれをして価値が所得から構成されるものという誤った結論をもひきださせた。これはかれの立場を俗流的な生産要因論に近づけるに足るものであろう。スミスのドグマとして周知の見解は，生産手段よりの移転価値を排除するかぎりで，価値構造を歪曲し所得をそのようにえがきだすかぎりでその源泉をにしらせる。

現代ブルジョア経済学に特徴的なことはスミスのうちに，かれの非科学的なものをみようとする点である。真実の立場をスミスにみさだめることがまれにあるにせよ，そのスミ

スの見方を，俗流価値論の変型に帰着させてしまう傾向がある。ライマによると，スミスが価値規定を労働支出に求めたとしても，このことは資本や土地の重要性を否定するものではなく，むしろ労働を自然力に対置し生産の主力として注目しているだけのことである。（I. H. Rima.: Development of Economic Analysis, Homewood 1967）。

さきのウェストもスミスの自然価格をゆがめて，こともあろうにスミスが先人者の間でひろく普及していた労働費用論を反駁するために，努力をしたのだという。スミスの非科学的な価値論は価値形成の真実の過程をぬりつぶし，分配流通の領域を過大評価する。弁護論的目的とくに賃金の凍結政策のために，論者は，スティグラーのように，この俗論を利用しようとする。かれによると，スミスは土地・資本・労働への報酬の総額が自然価格をなすと考えたのであり，この要因中一つの価格騰貴つまり賃金増加はこれがはいりこむ商品の価格をつり上げるのだと。普通もっとも悪用される生産要因論はスミスのもとで容認されているものの，かれの分配論に，現代ブルジョア経済学が結びつけようとする生産要因論という用語はスミスのもとにはない。機能報酬としてかれが所得を論ずるのは，労働・資本・土地を生産の個別的要因と考えていたことを意味するにすぎないが，その要因は，生産物中から賃金・利潤・地代の形態でその一定割合を受領する権利を与えるとライマはいう。

使用価値が結果としてでてくる単純労働過程と，価値形成過程の混同，相異った過程にはいる要因の混同にもとづく三要因論は明瞭に弁護論的傾向を有するから，資本の搾取性格をかくすために，形態をいろいろかえてブルジョア経済学が広く利用するのはけだし偶然ではない。所得分配への大ていの現代的アプローチは，方法的志向としては機能論であり，誤ったことに，さまざまな所得は生産に寄与する要因の報酬なのだと考えてしまう（W. J.Barber:A History of Economic Thought, Harmondsworth, 1967）。この考え方はサミュエルソンとても同じ。かれは労働・資本，そして自然資源を要因所有者に所得をもたらすものとしてえがきだす。それによると，資本は純粋生産性を保持するが，土地は“固有な経済的地代”の形態で所得をもたらすと。ちょっとみれば分かるように，現代ブルジョア経済学はスミスよりも，いっそう俗流的であり，その内容についても，スミスでは階級的へだたりを強調するのに，現代のはそれを無視してかかる。再生産論におけるスミスの誤論とりわけ社会的生産物価値と国民所得が一致するという見解を現代弁護論は宣伝し，そのかぎりで生産物形成メカニズム，搾取階級の所得を、ひいてはブルジョア社会の階級敵対の再生産をもおおいかくす。オランダの経済学者ペンは，スミスのドグマをうのみにして，社会的生産物価格を次のように特徴づけた：国民生産物価値は賃金・利子・地代の

総計にひとしいから，一定生産物の価格総額である。それとひきかえに，それを市場でうらなければならぬ(J. Pen: Modern Economics,Harmondsworth 1967)。スミス再生産論における資本分類の非科学的な見解，流動資本と流通資本の混同を引用して，ネービンは工場・鉄道・家屋などを含む固定資本と相並んで，原料・半製品・ストックからなる機能資本を区別する(E. Nevin: Textbook of Economic Analysis,L-N.Y. 1967)。固定資本に相対的に耐久的な財たる機械とか構造物を含め，当期資本なり流動資本には，貨幣またはこれに速転できる財たとえば販売をまたれる債務や貯蓄を帰属させる。この見解はイギリスのライトのもの(F. J. Wright: An Introduction to the Principles of Economics, Oxford 1965)。生産資本の特殊形態としての流動資本と流通資本（販売をまつ既製品，在庫）を混同することはまれであるけれども，現代ブルジョア経済学は，賃金を含む流動資本という範疇を一般に排除して，スミスが案出した固定資本と流動資本の対置を，同時にまた資本と労働の対置をかき消してしまおうとする。俗流ブルジョア経済学は，古典経済学なかでもスミスの非科学的な規定を反芻・抽出し，それを系統化するところに成立したが，現代経済学はスミス理論のこの規定を引用句にまで高め，それを科学に対決せしめながら，マルクス経済学との闘争に利用しようとしているのである。現代ブルジョア経済学のイギリス古典経済学にたいするいくつかの態度はけっして不思議ではない——それは俗流弁護論の性格によって制約される。18世紀末から19世紀初頭にかけて，革命的プロレタリア運動が舞台に出現するのをみちびいた産業革命期よりずっと，資本制生産とその歴史的運動との本質に関して，ブルジョア経済学はつねに非科学的立場を占めている。けだし，社会発展の経済法則はこの条件下で，ブルジョア経済学が弁護するブルジョアの利益と矛盾するからだ。経済学史一般にたいしてと同じように，スミス理論を，ブルジョア経済学は，その前にあるイデオロギー課題に従属させようとし，これを俗流化する。

スミス理論を自分の考え方にもとづいて勝手に解釈するのもブルジョア経済学の特質である。バーバラによると，スミス理論は現代の用語でいう成長論を開発したのだ。この成長理論家は，量的側面にアクセントをおいた視点からスミス理論の重要な問題を研究するものだから，一面，社会経済的内容を去勢して純数学的議論に化しスミスの科学的側面に対抗する新たな手段がつくりあげるとともに，他面，資本主義の数量関係を反映して，成長論者にスミス理論の科学的見解をかし与える。

国家独占資本主義にふさわしい資本規制の主要形態の一つとして成長理論が位置ずけられるが，それはいくつかのモメントで伝統的なブルジョア俗流経済学と区別される。それは，スミス遺産をうけとめる仕方にも再現しないはずはない。ケインジャンの代表に，史

家セリグマンは，経済学の父としてのスミスやリカードの新古典派的綜合をよびかけた。もともと古典経済学というマルクスの造語にかかる概念は学史分析で重要な役割をはたした。いうまでもないが，かれによると，それは何よりもブルジョア経済学であるが，しかしブルジョア社会の内的関連をともかく解明しようとする経済学のことで，俗流経済学とは裁然と区別される。が，同時に，後者のブルジョアイデオロギーとしての客観的制約の性格も問題になる。だがケインズは何びとも知るように，この区分をぬりつぶし，ミル，マーシャル，エジワース，ピグーを，リカードの後継者にいれ古典学派と名づける。古典学派にはなお，スミスやリカードはもとより，俗流的追随者たるセイ，ジェームス・ミルその他が含まれる。この学派からの脱却がまさにケインズの仕事だった。国家的規制論や資本制経済の再生産論の数量化を開発したが，ケインズはスミス・リカードの科学的規定をまったく無視するわけにゆかず，この点で次のような叙述がある。すなわち，それによると，すべてが労働によって生産されるという古典学派（スミス・リカード）の教義は精神上は，われわれのものなのだと。しかしこの立場はブルジョアイデオロギーに打撃を加えることになるとケインズは理解した。そこで一定の技術，天然資源，有効需要が現存するなかで，唯一に作用する生産要因として労働が企業者ならびにその補助員のサービスをも含めて，研究されるのがのぞましいというぐあいに修正した（“一般理論”）。労働価値説に反対したけれども，量的依存関係だけは借用して，更に経済数値の測定単位として不熟練労働者の活動期間にひとしい単位労働を採用した。この貨幣表現が単位賃金であり，ケインズはこうして労働を賃金で表現しょうともした。スミスの所得ドグマにたいしても，ケインズの態度は二面的。第1に，社会的生産物価値Aを，生産手段の移転価値（使用者費用Uプラス追加費用V）と新価値（要素費用つまり利子・地代・賃金プラス企業者利潤）とに二分する。こういう区別なしには再生産過程の研究はむつかしい。しかし価値規定のなかに何とか階級対立をぬりつぶし任務を実現したいとかれは志向するから，第2に，この敵対を反映する価値の大いさ（可変資本と剰余価値）を一体にして，この所得合計に生産物価値が等しいとみなして，社会的生産物と国民所得の混同，移転価値部分を無視。スミスのドグマを反復するのである。曰くY＝C＋I。

一面でスミスのドグマを否定し，他面でそれを復活する。このケインズの場合，ドグマへの志向は価値の正しい区別を排除しないわけである。固定資本と流動資本へのケインズの追り方についていえば，スミスの誤論は克服していないが，リアリズムが欠けているというのではない。資本の両成分の相異を，ケインズは価値補塡の差だけについてみようとする。流動資本は一かつして消失するのにたいして，固定資本は漸次的にといったふうに。

生産過程における価値移転の仕方には，たしかに区分の基礎はあるものの，無視して注目しない。かれは流動資本と流通資本の若干の要素を混同した。たとえば，滞貨を流動資本に含めるなど。

成長論者のスミス所説への数量的アプローチは，かれに資本制再生産の分類にとり重要ないくつかの規定をスミスから借用させるキッカケになるが，同時に量的解釈にそって弁護論の新しい可能性も付与する。成長論にとっては，スミスによる生産的労働は次の基準に答えなければならぬ。1.蓄積の必要条件として物的商品を生産すること。2.将来に蓄積のために利用される剰余を与えること。バーバラによると，スミスは生産的雇用と，労働が資本を取扱う雇用と混同した。しかしこの解釈は資本制経済における生産的労働の本質をあいまいにする。スミスはといえば，この解明に接近し，資本と交換される労働，資本家に剰余価値を生む労働———これを生産的労働と考えた。論者によると，生産的労働は拡大されるけれども，これは単純労働の過程から研究するだけで，諸関係の機能としての社会的形態を無視するからである。

成長理論としてのみスミスを解釈することは，労働価値説から社会経済本質をぬき去りスミス理論を利用させる。バーバラによると，それは，成長の存否を確定する手段として役だつ観点からみられる。ちょっとみると，スミスはこの視点の息づく素地を与えているようだが，かれは投入労働による価値論を早期未開の社会状態に帰した。しかし第二の価値規定は成長論者の期待する問題に答えない。バーバラによると，スミスは労働を非同質と考えたのだが，複雑労働が単純労働に実際上十分正確に還元されるためには，何ゆえに同一の手続が生産物評価にも適用されてまずいことがあるものか，そうすれば，価値と現実価格の間の差異もなくなるだろうにと。バーバラの対案は人為的である。複雑労働の単純労働への還元はそれ自体としてでなく，市場における生産物等価によっておこなわれるからして，価値の客観的存否を明らかにするのはこの過程にほかならない。成長を測定する手段として，価格をみとめるけれども，価格が価値の貨幣的表現だということをかれは忘れる。スミス価値論が成長理論に役だたぬとするのに，労働価値説を経済値測定の手段として使用するのは一貫しない。労働価値説の質的問題はかれらには否定されるものであり，これへの反論が多少とも現代弁護論に共通の特徴であり，これにたいする好意的態度はまことに時宜に適したものだというわけである。経済のポテンシャルを，物をつくるのに必要な労働時間を比較して確定できるのだろうか。

労働価値説はスミスにとり，資本主義の大量現象を研究した結果として体得された，分析への直観的な方法的アプローチである。ブルジョア経済学は労働価値説への態度を，否

定内的に変化させてきた。すべての規定をすてさるのではなしに，その若干のものを自分に役だてる。労働価値説が確定した数量関係をとりいれるが，同じく明らかにされた因果関係は無視してしまうといったふうに。それはいずれにしても，問題をゆがめることになる。成長論者はスミス理論を一方的に，総生産関数の特殊な一角としてえがきだす。それによると，生産要因論は，スミスの場合，かならずしも明らかではないが，次のような仕方で整理できる。Y =Y〔K, N, T(t,m)〕，ここでYは社会的生産物，K：資本，N：労働T(t,m)：時間と物量mに依存する技術の状態(H. Barkai: A Formal Outline of Smihthian Growth Model, *The Quarterly Journal of Economics*, vol. LXXIII No. 3 (Aug 1969)。だがしかし，次の二点でスミスはゆがめられる。1.科学的アスペクトと考えられる価値・剰余金価値の形成過程を研究することが欠落し，増加分は単純な労働過程に解消され，生産要因論の叙述から一歩もでずに，剰余価値過程と労働過程を思わず混同したとはいえ，折角スミスがうつしだした資本制経済の特質が消失することになる。2.単純労働過程におけるスミス叙述が不正確になる。富をつくる決定的な役割を，スミスは労働と企業に求めたのに，いまや物的形態が決定的となる。こうした歪曲にもかかわらず，生産要因論の視点から論者は，再生産の現実的アスペクト，たとえば，生産高と過程にはいる諸要因との量的な依存関係を抽出する。

このように，スミスの理論遺産に関する態度では，伝統的なブルジョア経済学と，現代の成長論とは同一でない。スミスの科学的諸規定全体を反駁するのが前者だったとすれば後者は，スミスが与えた資本制経済の因果関係をあいまいにし俗流化し不問に付すけれども，なお科学的意義を有する再生産の数量的依存関係は利用する。スミス，古典経済学一般にたいする現代ブルジョア経済思想志向の相異はそこで生じた構造的変化のあかしである。この流派は現在，経済の国家規制の賛否により区別されるのではなく，研究対象の相異（現象をとらえるのに歴史的に本質的なアスペクトをもってするのか，俗流的仕方でなのか）から区分される。俗流経済学は階級的性格から弁護論しか与えない。これより前進して，成長論者は数量的な機能アスペクトを取扱い，いっそうリアルな立場を保持して，しかも研究対象における区分をスミス解釈のなかにそれなりに実証するのである。

ところで，理論経済学にたいするスミスの寄与は大きく，経済学がしたがう領域に全体の完結性を与え，先行者たちの間にみられた部分アプローチを克服して，本質・形態ともに，国民経済の科学とした点にある。歴史時代の要求に答え，かれの研究は，自由競争の段階における資本制経済が機能する構想を開発し，ブルジョア階級の手に反封建的闘争の有力な理論的イデオロギー的武器を供した。スミス理論は，ブルジョアジーとプロレタリア

ートの階級闘争がまだ大量的でなくするどい形態をとらない時代，科学的分析がブルジョア的視界のなかでも可能な時代に照応した体系であった。それはさまざまなアスペクトで経済発展の刺激となり，科学的な規定はリカードやマルクス主義のなかで発展していった。たとえば，労働価値説にもとづいて経済の研究，それも個別部門の認識ならず全社会的に生産を研究するという問題提起，労働を価値源とし社会の基本階級を明確にすること，労働の搾取にもとずく敵対性格の確定———こうしたことはスミスの科学的エレメント。しかしこれは不十分で撞着や矛盾をまぬがれない。が，スミス理論は科学的経済思想に大きく影響し世界経済思想の共有財産となった。